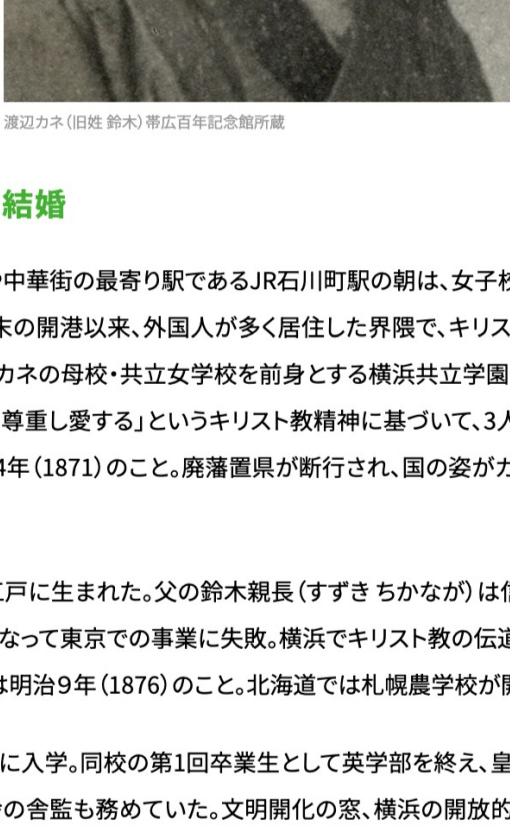


晩成社の証人、渡辺カナ ――十勝開拓を語り継ぐ【前編】

明治時代中期、英国人青年画家ランダーは、道さえ通じていない十勝の開拓地で、流暢な英語を話す女性に驚いた。その人の名は、渡辺(わたなべ)カナ。横浜のキリスト教系女学校を出て母校の教師をしていた彼女が、なぜ、開拓者になったのか。十勝開拓の祖と称される晩成社(ばんせいしゃ)を、後世にどう伝えたのか。ひたむきに生きた女性の生涯から、十勝が見えてくる。

文：北室かず子/写真：田淵立幸



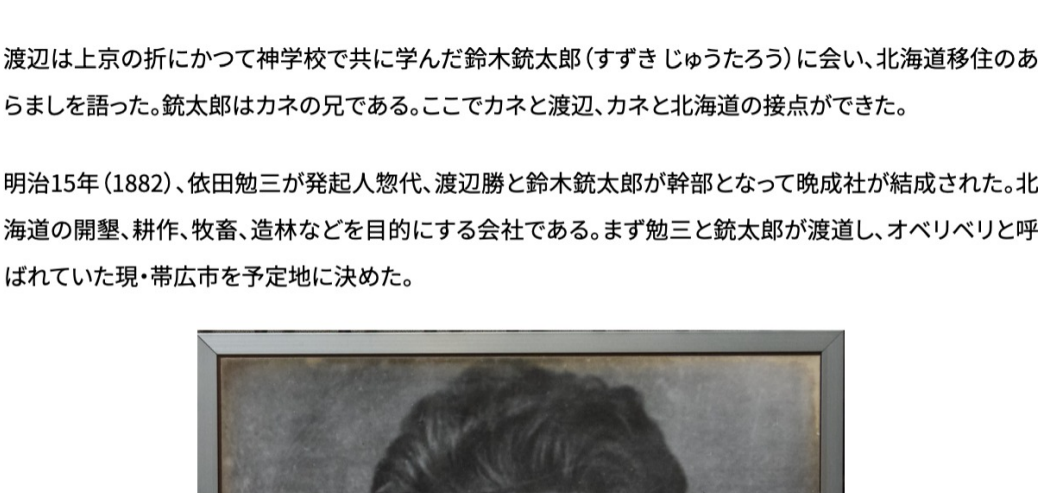
渡辺カナ(旧姓 鈴木) 帯広百年記念館所蔵

移住を条件とする結婚

港ヨコハマの中心、元町や中華街の最寄り駅であるJR石川町駅の朝は、女子校生であふれる。この駅に近い高台の山手地区は、幕末の開港以来、外国人が多く居住した界隈で、キリスト教系の女子中学・高校がいくつもあるからだ。渡辺カナの母校・共立女学校を前身とする横浜共立学園も、長い歴史を刻んできた。「ひとりの人間を無条件に尊重し愛する」というキリスト教精神に基づいて、3人の女性宣教師が女子教育機関を設立したのは明治4年(1871)のこと。隣藩置県が断行され、国の姿がガラリと音を立てて変わった年であった。

カナは、安政6年(1859)江戸に生まれた。父の鈴木親長(すずき ちなが)は信州の上田藩で重職を務めていた。しかし明治の世になって東京での事業に失敗。横浜でキリスト教の伝道活動に携わる。カナがキリスト教の洗礼を受けたのは明治9年(1876)のこと。北海道では札幌農学校が開校した年である。

カナは16歳で共立女学校に入学。同校の第1回卒業生として英学部を終え、皇漢学部に入り、卒業後は母校の教師となった。寄宿舎の舎監も務めていた。文明開化の意、横浜の開放的な空気の中で、カナの可能性は無限に広がっていた。



カナが敬慕した外国人宣教師と共に、横浜にて、帯広百年記念館所蔵

そんなカナと北海道開拓の接点はどこにあったのか。

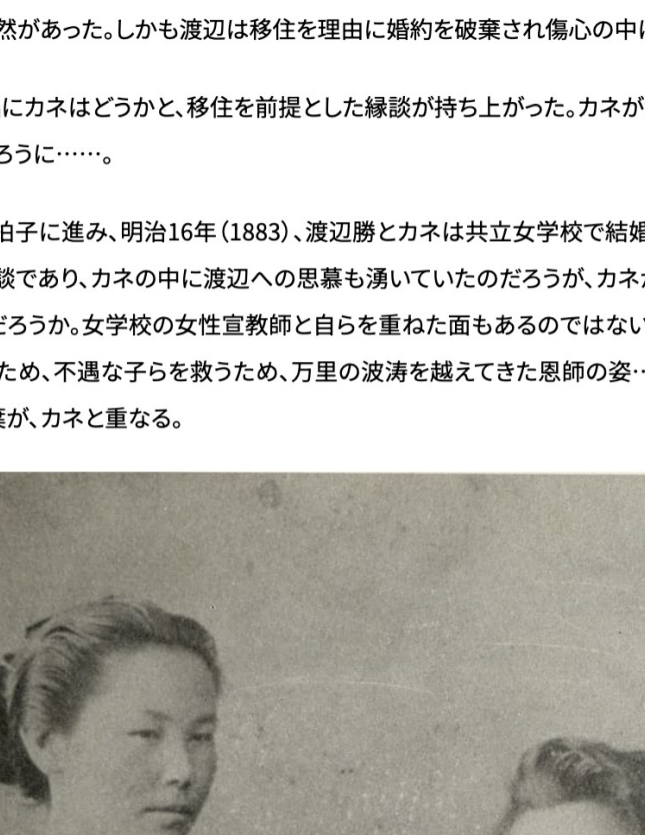
現在の静岡県松崎町(まつざきょう)である大沢村(おおさわむら)の豪農、依田(よだ)家の三男・勉三(べんそう)は、慶應義塾を経て、スコットランド出身の宣教師が開いた英学塾に通った。ここで出会ったのが尾張徳川家の元家臣、渡辺勝(わたなべ ます)だ。その後、勉三は兄が開いた学校で教鞭をとり、渡辺にもこの学校の教師への就任を請うた。

帯広百年記念館の学芸員、大和田努(おわた かつむ)さんはこう語る。「依田家は養蚕、海運など幅広くビジネスを行い、県会議員も輩出した地域のリーダーでした」。

家督を継ぐのは兄なので、勉三の周囲で北海道開拓の構想が回まっていたと思われる。

渡辺は上京の折にかつて神学校で共に学んだ鈴木就太郎(すずき じゅうたろう)に会い、北海道移住のあらしを語った。就太郎はカナの兄である。ここでカナと渡辺、カナと北海道の接点ができた。

明治15年(1882)、依田勉三が発起人惣代、渡辺勝と鈴木就太郎が幹部となって晩成社が結成された。北海道の開墾、耕作、牧畜、造林などを目的とする会社である。まず勉三と就太郎が渡道し、オペリベリと呼ばれていた現・帯広市を予定地に決めた。



明治15年(1882)5月、北海道視察の際の依田勉三、帯広百年記念館所蔵

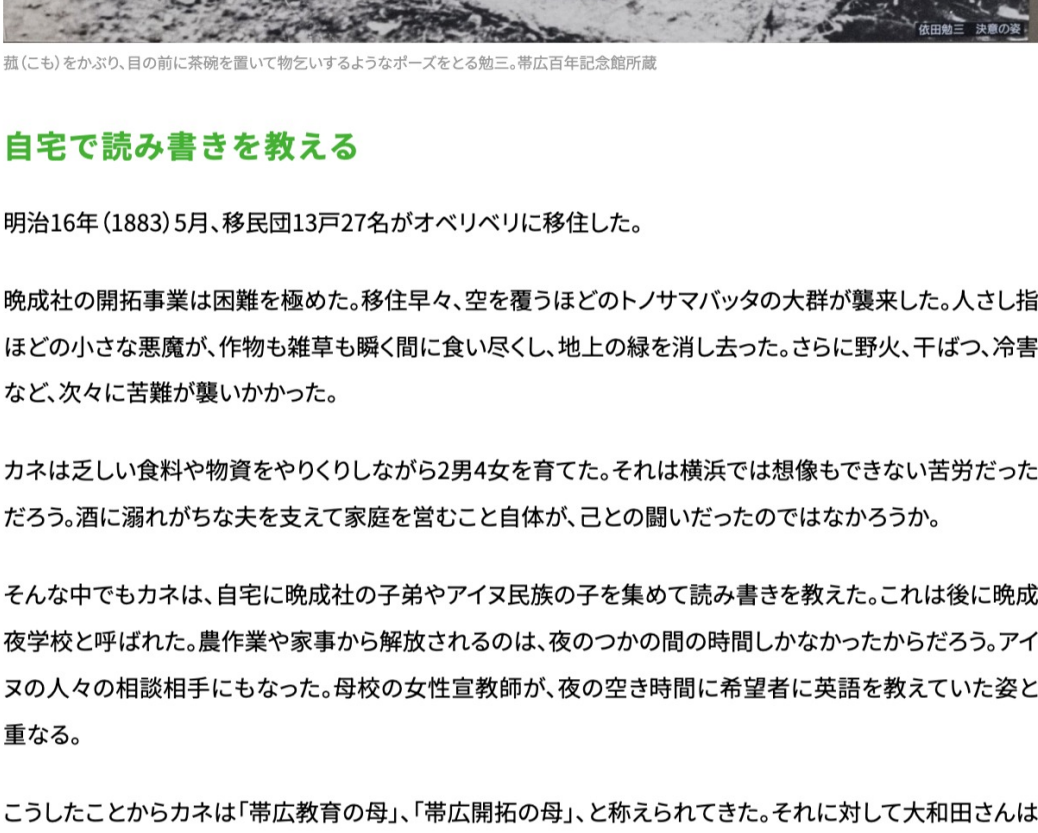


明治15年(1882)5月、北海道視察の際の鈴木就太郎。この年、オペリベリで結婚する。帯広百年記念館所蔵

カナの父、親長も開拓団に加わることになった。渡辺も鈴木父子も、言うなれば没落士族。生きるために新天地に賭ける必然があった。しかも渡辺は移住を理由に婚約を破棄され傷心の中にあったらしい。

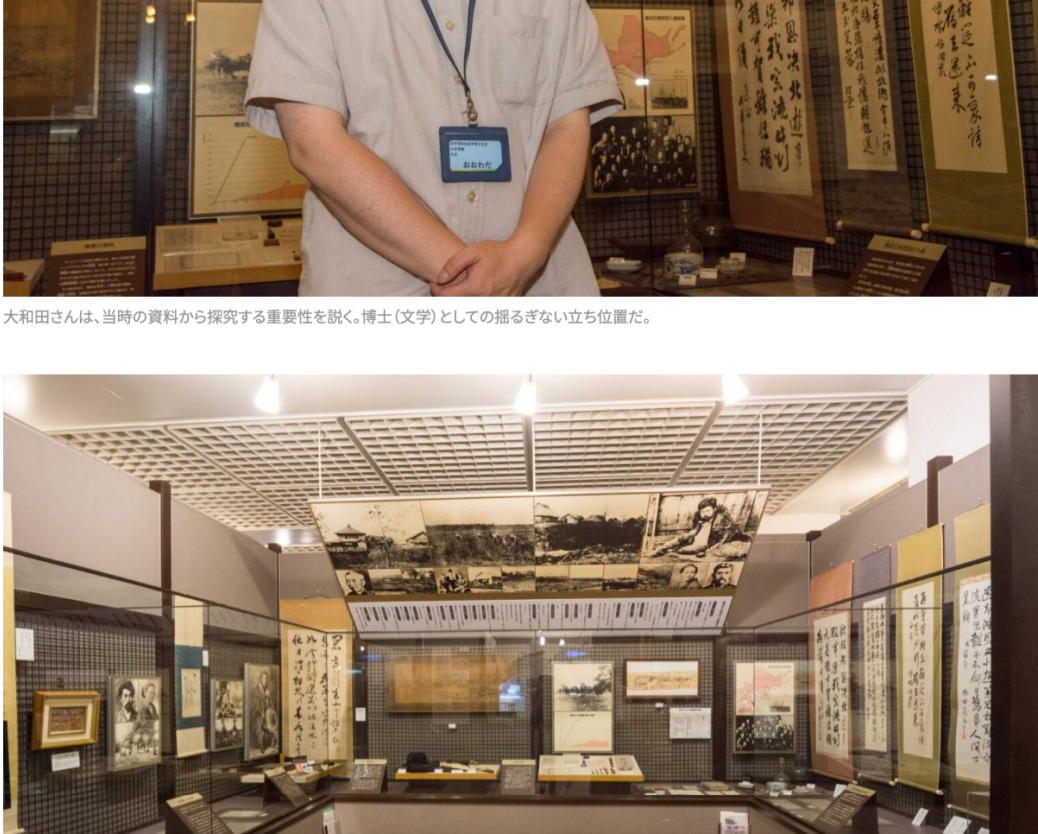
そこで、渡辺の伴侶にカナはどうかと、移住を前提とした縁談が持ち上がった。カナが渡道しなければならぬ理由はないだろうに……。

だが話ほとんどん拍子に進み、明治16年(1883)、渡辺勝とカナは共立女学校で結婚式を挙げる。家長である父の勤める縁談であり、カナの中に渡辺への思慕も湧いていたのだろうが、カナが結婚を受け入れた理由は、それだけだろうか。女学校の女性宣教師と自らを重ねた面もあるのではないか。極東の島国に女子教育の光を点すため、不遇な子らを救うため、万里の波濤を越えてきた恩師の姿……。ミッション、使命に生きるという言葉が、カナと重なる。



明治16年1月に撮影された渡辺勝と鈴木カナの撮影記念写真。2人は4月9日に結婚式を挙げた。帯広百年記念館所蔵

ところで移住を前に、勉三は写真を撮っている。大和田さんいわく「撮影されたのは北海道ではなく、伊豆か横浜です。『こんなみずばらしい格好になっても戻らないぞ』という決意の表明とされています」。勉三のアイデアには感心するが、開拓の辛苦を知らないからこそできたパフォーマンスという評もある。



勉三(も)をかぶり、目の前に紙を置いて物乞いをするポーズをとる勉三。帯広百年記念館所蔵

自宅で読み書きを教える

明治16年(1883)5月、移民団13戸27名がオペリベリに移住した。

晩成社の開拓事業は困難を極めた。移住早々、空を覆うほどのノサマバッタの大群が襲来した。人さし指ほどの小さな悪魔が、作物も雑草も瞬く間に食い尽くし、地上の緑を消し去った。さらに野火、干ばつ、冷害など、次々に苦難が襲いかかった。

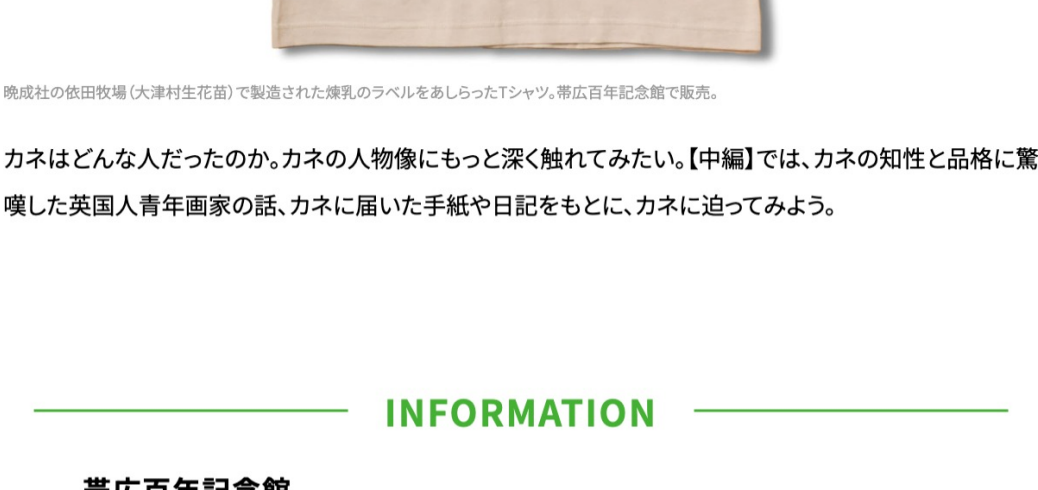
カナは乏しい食料や物資をやくりくりながら2男4女を育てた。それは横浜では想像もできない苦勞だっただろう。酒に溺れがちな夫を支えて家庭を営むことと自身が日との闘いだったのではなかろうか。

そんな中でもカナは、自宅に晩成社の子弟やアイヌ民族の子を集めて読み書きを教えた。これは後に晩成夜学校と呼ばれた。農作業や家事から解放されるのは、夜のつかの間の時間しかなかったからだろう。アイヌの人々の相談相手にもなった。母校の女性宣教師が、夜の空き時間に希望者に英語を教えていた姿と重なる。

こうしたことからカナは「帯広教育の母」、「帯広開拓の母」、と称えられてきた。それに対して大和田さんは「もちろん間違っていないのですが、カナが生きたリアルタイムの資料から慎重に解き明かす姿勢が大事だと思います」と言う。なぜなら後世の表現は、その時代が好む像によって変わるから。



大和田さんは、当時の資料から探究する重要性を説く。博士(文学)としての磨きをいまだに位置した。



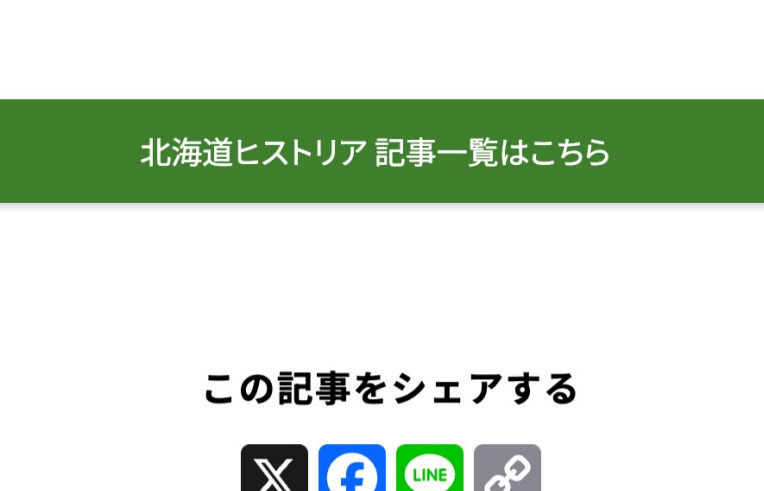
帯広百年記念館にある晩成社の展示。



帯広百年記念館



晩成社依田商店のハンコがデザインされたミュージアムグッズ。帯広百年記念館で販売。



晩成社の依田牧場(大津利生花園)で製造された生乳のラベルをアレンジしたTシャツ。帯広百年記念館で販売。

カナはどんな人だったのか。カナの人物像にもっと深く触れてみたい。【中編】では、カナの知性と品格に驚嘆した英国人青年画家の話、カナに属した手紙や日記をもとに、カナに迫ってみよう。

INFORMATION

帯広百年記念館

住所 帯広市緑ヶ丘2

Google Map

電話番号 0155-24-5352

開館時間 9:00～17:00(入場は16:30まで)

休館日 月曜(祝日の場合は開館)、祝日の翌日(土曜日曜は開館)、年末年始(12月29日～1月3日)

入館料 一般380円、高校生・65歳以上190円

アクセス 帯広駅より約2km、拓殖バス「緑ヶ丘6丁目」下車・徒歩約7分、十勝バス「春駒道12条」下車・徒歩約8分

関連リンク <https://museum-obihiro.jp/occm/>

※情報は取材時のものです。最新情報は各公式サイト等をご確認ください。

この記事の
《中編》を読む
2026.10.26公開予定

この記事の
《後編》を読む
2026.11.16公開予定

北海道ヒストリア 記事一覧はこちら

この記事をシェアする

